科学研究費助成事業（基盤研究（S））公表用資料
［研究進捗評価用］

平成２３年度採択分
平成２６年３月６日現在

水都に関する歴史と環境の視点からの比較研究

A Comparative Study on Water Cities from the Viewpoint of History and Environment

陣内　秀信（JINNAI　HIDENOBU）
法政大学・デザイン工学部・教授

研究の概要
人類が自然条件を生かし世界各地に形成してきた個性豊かな「水の都市」は、近代の陸の時代には否定され、長い間、忘れられた存在だった。本研究は、こうした「水都」に歴史と環境の両面から光を当て、それが秘める価値を再発見・再評価し、現代社会において再生させるための理念と方法を学祭的な方法によって、国際比較の視点から探求する。

研　究　分　野：都市史、建築史
科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠
キ　ー　ワ　ー　ド：水都、類型学、サステイナビリティ、文化的景観

１．研究開始当初の背景

世界には魅力的な水都が数多く存在する。海や川の水辺に立地し、舟運で経済を繁栄させ、美しい景観や華やかな文化を育んだ。だが、工業化を進め車中心の陸の時代となった20世紀には、水辺空間が犠牲になり、市民にとって遠い存在になった。法政大学では1994年に水の都市の再生を研究する「エコ地域デザイン研究所」を創設し、国際的なネットワークを形成しつつ、成果を蓄積してきた。

２．研究の目的

歴史と環境を結合する新たな視点に立ち、世界の水都を学際的かつ総合的に研究する。水を否定した近代の陸の論理を乗り越え、海から、そして川から都市や地域を捉え直し、自然のもつ豊かさを環境形成の根幹に取り戻すことを目指す。本来、個性ある水の環境と生活文化を歴史のなかで育んできた＜東京＞の水都としての特徴を、国際的な視点から比較解明することも大きな目的である。

３．研究の方法

異なる歴史観、環境観をもつ西の世界（欧米）と東の世界（アジア・日本）をグローバルな視点で比較研究する。従来、別の専門領域として扱われがちだった＜歴史＞と＜環境＞を結合し、水都の形成・変容・再生の動態をサステイナビリティの視点から考察する。水都を類型に分け、古地図・史料を活用して現地調査を実施し、その形成過程と空間構造を分析考察し、再生の方法も探求する。

４．これまでの成果

１）世界の「水都」を比較研究し、その立地、及びそれと結びつく都市形態の在り方から類型化を試み、時代ごとの水都形成の大きな流れを歴史的に把握できた、日本の水都の特徴も、その比較のなかで明確化できつつある。同時に、その認識を基に、現在、世界の水都の再生がどのように展開しているかを系統的に解明できた。

世界を代表するハンブルク、アムステルダム、東京などの運河が巡る水都の空間構造は、都市全体が港の機能をもつ「内港システム」をとったが、時代が下ると、港湾施設・機能が大型化し、港湾の活動が内部の運河から外の広い近代運河へ、さらに海や大河に開く「外港システム」へと転換した。究極の港の形態が、ニューヨークが示すピア（桟橋）群が海（湾）に連なる港湾空間の形式である。コンテナー埠頭化など物流システムの近代化で、港湾空間は都市の中心から遠ざかり、使われず見捨てられた旧港周辺ゾーンは長らく荒廃状態にあったが、１９７０−８０年代以後、再生段階に入り、世界各地でダイナミックな都市空間として蘇りを見せている。こうした一連の歴史的な動態を国際比較の上で分析・考察した。

２）東西世界の比較を通して、合理性・機械化を追求し自然・水を人間の意思で支配・制御・活用した西洋文明と、自然と共生する姿勢を見せたアジア・日本のおける水都の在り方の違いを明確に把握できた。

西洋では、「水車」の活用が産業の発展を促し、特に産業革命の進展とともに水力エネルギーを利用した繊維、鉄鋼などの産業がイギリス、ドイツに発達し、さらには、北米に伝播して、新たなダイナミズムをもつ近代産業社会の水都を内陸河川沿いに形成した。それを支えたのが、河川、「運河」の舟運システムで、「閘門」で水位を調整し運河の舟運を活用する都市、地域づくりが大々的に展開した。それはイタリアに始まり、フランス、ドイツ、そして産業革命とともにイギリス、さらには、北米に伝播し、広範な舟運ネットワークを形成した。なかでも、海面の干満差の大きいイギリスでは、閘門で船の出入りを調整する「ドック」が発達し、１９世紀的な独自の港システムを築いた。２０世紀の後半には時代遅れの形式となり衰退したが、近年、イギリス各地でその水辺空間が再生の対象となり、都市の魅力アップに貢献している。以上のような欧米の水都の形成・発展・衰退、・再生の論理を、歴史的かつ系統的に解明できた。

一方、アジアでは水はより象徴的な存在であるという側面を近代にまで持ち続けてきた。アジア各地で見出せる水に恐怖を感じ、同時に畏怖の念を抱くという点は、日本にもそのまま当てはまる。水は洪水や干ばつで災いをもたらすが、同時に恵みのもとでもあり、そこに信仰心が生まれる。こうした水への考え方、水と人間の根源的な繋がりの特徴が、西洋と日本・アジアの文明の在り方の大きな違いとなって現われてきたことを明らかにしつつある。

３）我が国の水都のうち、特に東京の研究に重点を置き、この都市が実に多様な水の機能・役割をもったことを歴史的に明らかにした。都心・下町のみならず、山の手、武蔵野・多摩の田園地帯も含め、東京の都市全体が「水の都市」の性格を色濃く示すことが明らかになった。本研究開始時に想定した、主に都心・下町が対象となる「水都」の概念は、大きく乗り越えられつつある。

４）近年、都市史研究、都市づくりにおいて、単に都市だけを扱うのではなく、その周辺に広がる後背地の地域（伊語で「テリトーリオ」という）との相互の有機的関係、ネットワークの在り方に注目が集まっており、「水都学」でもその見方が重要であることを、江戸東京と荒川・利根川水系、ヴェネツィアとシーレ・ブレンタ水系、ニューヨークとハドソン川流域等、国内外の幾つもの事例によって示した。水（海、川）のネットワークによって多様に形成されてきた本来の＜地域＞の有機的な結びつきや固有の資産を発掘し、現代の視点からそれを再構築する方法を探求しつつある。

５．今後の計画

水都の形成、その構造的特徴の解明を完成させるのと並行して、水都の価値の多角的な検証と水都再生の理念及び方法の探求を深める。平成２６年度には、水都学構築に必要な３つの論点（1.聖なる場としての水辺、２，水系とテリトーリオ、３．近代港湾空間の形成とその衰退・再生）をテーマとする国際シンポジウムを開催し、さらには日本の都市が本来はエコシティであったことを歴史と環境の視点から実証しつつ、水と密接に結びついた 21 世紀型の都市づくりの理念と手法の日本モデルを確立することを目指す。

６．これまでの発表論文等（受賞等も含む）

<著書>

・陣内秀信・高村雅彦編『水都学II』法政大学出版局、2014 年 3 月

・伊藤毅「近世都市の成立」大津透、藤井譲治、吉田裕、李成市編『岩波講座 日本歴史 第 10 巻 近世1』岩波書店、PP. 239-276,2014 年 1 月

・陣内秀信＋法政大学陣内研究室編『水の都市江戸・東京』講談社、2013 年 8 月

・高村雅彦「『水郷』寧波の生活 『水の世界』の都市環境」『東アジア海域に漕ぎ出す 第 3 巻くらしがつなぐ寧波と日本』東京大学出版会、2013 年 5 月、PP23-42.

・河村哲二・岡本哲志・吉野馨子編著『「3.11」からの再生－三陸の港町・漁村の価値と可能性』御茶の水書房、2013 年 5 月

・陣内秀信・高村雅彦編『水都学I』法政大学出版局、2013 年 3 月

・陣内秀信・三浦展共編著『中央線がなかったら見えてくる東京の古層』NTT 出版、2012 年 12 月、PP.17-32、94-138.

・H.JINNAI, M.RUSSO, *AMALFI CARATTERI DELL ’EDILIZIA RESIDENZIALE NEL CONTESTO URBANISTICO DEI CENTRI MARITTIMI MEDITERRANEI*, CENTRO DI CULTURA E STORIA AMALFITANA, 2011.12.

＜論文＞

・伊藤毅「プロローグ－危機と都市」『年報都市史研究20－危機と都市』2013年3月15日,PP.2-5

・陣内秀信「隅田川ルネサンス－母なる川（隅田川）よ よみがえれ－」『都政研究』527 号、2012 年 8 月、PP.4-9.

・陣内秀信「都市を読むことと地域の原風景」『総合論文誌』NO.10、日本建築学会、2012 年1 月、PP.7-10

<受賞>

・2011 年度日本不動産学会賞 著作賞（学術部門）『環境貢献都市 東京のリ・デザイン』清文社（2010.10）（浅見、中井、山口、砂土原、陣内）、2012.5

ホームページ等

・「世界の水都/water city of the world」http://suito.ws.hosei.ac.jp/link.html